

2.20倍, 3.18倍, 血流量は1.18倍, 1.56倍増加した。以上の結果より, AT-II投与により適度の昇圧を得ることにより, RISにおける腫瘍集積を改善することが可能であることが示された。

5. 高解像²⁰¹Tl SPECTによる脳腫瘍の検出

—検出能に関する検討—

藤山 昌成 濑戸 光 清水 正司
神前 裕一 永吉 俊朗 呉 翼偉
森尻 実 野村 邦紀 中嶋 愛子
渡辺 直人 柿下 正雄 (富山医大・放)

CTおよびMRIにて脳腫瘍が疑われた126病変を対象に, 3検出器型 γ カメラを用いた高解像²⁰¹Tl SPECTによる脳腫瘍の検出能について検討した。腫瘍性病変104病変中99病変がTl-陽性, 非腫瘍性病変22病変中21病変はTl-陰性で, Sensitivity: 95.2%, Specificity: 95.5%と良好な結果を得た。また, 腫瘍最大径で2群に分けてみると, 最大径2cm以上の腫瘍: 63個中60個がTl-陽性でSensitivity: 95.2%, 2cm未満の腫瘍: 41個中39個がTl-陽性でSensitivity: 95.1%と有意差は見られず, 小さな脳腫瘍の評価にも²⁰¹Tl SPECTが有用であると思われた。

6. ^{99m}Tc-ECD dynamic SPECTを用いた脳血流量定量化の試み

土田 龍郎 山本 和高 杉本 勝也
楊 景涛 秋吉 司 山元 龍哉
林 信成 石井 靖 (福井医大・放)
脇 厚生 (同・放医薬)

ECDの定速静注とdynamic SPECTにより, 直接的な局所脳血流量の定量化を試みた。健常男子3例に対し, 10分間の定速静注, 間欠的動脈採血と1フレーム1分のdynamic SPECTにより得られたデータをPatlak plotを用い解析, Ku値を求めた。Ku値は¹⁵O-CO₂ steady state法により得られた脳血流量(rCBF)と比較した。直線回帰により, Ku=0.19+0.54 rCBF, r=0.85の良好な相関が得られた。本法による局所脳血流量定量化は可能であると考えられた。

7. 脳血流SPECTにおけるCCD発現とMRIによる深部白質, 脳幹部病巣との関係

李 松柏 中島 弘道 松村 要
竹田 寛 野村 新之 奥田 康之
中川 毅 (三重大・放)

脳血流SPECTとMRIともに施行した慢性期病変例で, MRIにて大脳皮質および白質に大きい病巣のない患者15例について, 小脳血流低下とそれに関する伝導路の障害との関係について検討した。結果: 皮質一橋一小脳路に病変があった11例の中, 7例(64%)にCCDが見られた, またCCDの見られた8例では7例(88%)に皮質一橋一小脳路に病変があった。それにより皮質一橋一小脳路の障害と, SPECTの小脳血流低下との関連性が示された。一方, 皮質一橋一小脳路に病変があつても, CCDの見られなかった例も(57%)あつた。今後SPECTとMRIの分解能の向上により, 脳病変の形態的変化と機能的変化の関係について, より精密な検討が可能になると考へた。

8. Creutzfeldt-Jakob病の2症例

—脳血流を中心に—

渡辺 直人 濑戸 光 清水 正司
呉 翼偉 藤山 昌成 森尻 実
野村 邦紀 中嶋 愛子 神前 裕一
永吉 俊朗 柿下 正雄 (富山医大・放)
谷井 靖之 柴田 良子 金 英道
倉知 正佳 (同・精神神経)
辻 志郎 (金沢大・核)

症例1は65歳男性である。症状, 神経学的所見およびEEGより, 同疾患が疑われCTおよびMRIを施行されたが, 特異的な所見は得られなかつた。IMPによるSPECTでは左側頭頂葉の限局した血流低下を認め, EEGと一致した所見であつた。症例2は59歳男性である。同様に症状, 神経学的所見および典型的なEEG所見よりCJと診断された。CTでは軽度の脳萎縮を認めた。MRI T₂強調像で両側基底核にhigh intensity areaを認めCJ病の典型所見と考えられた。Tc-ECDによるSPECTでは, 半球全体に不均一で, 特に右側に血流低下傾向を認めた。EEGに一致すると考えられた。SPECTはCJ病評価に有用である。